

目 次

まえがき1

第一章 音声学はどういう学問か3

一 音声学は 言語外形の学問である3

二 音声学は 言語学の第一階梯である3

三 音声学は 実験実証の学である4

四 音声学には 内的構造と外的構造とが見わけられる6

五 音声学と音韻論とは 表裏の関係にある7

六 音声学の目的は 二様に考えられる9

七 音声学の参考書 音声研究の回顧9

L. L. での作業12

第二章 人間の音声

——音声器官と音声製出——15

一 呼気の器官15

二 喉腔と声帯15

三 喉腔・口腔・鼻腔17

四 音声製出18

第二章 前章補足～声の衛生～	20
L. L.での作業	20
第三章 声と心	22
一 外形と内容	22
二 表現過程	22
三 言語生活	22
四 自然音声と心の音声と	23
L. L.での作業	23
第四章 話しことばの音声の性質	27
第一節 表現音声	27
第二節 抑揚	28
一 抑揚とその所在	28
二 抑揚の高低波	29
三 文抑揚（文のイントネーション）（文アクセント）	30
1 文抑揚とその研究	30
2 抑揚パターン〈特質的傾向〉の把握	31
3 パターン抽出（類型帰納）のための着眼法	32
四 文末の声調	33
五 文抑揚の地方差	34

六 文アクセントと語アクセント	39
七 連文抑揚	41
八 抑揚と意味作用	42
九 日本語の文抑揚の特質	43
十 抑揚研究の重要性	45
L. L.での作業	46
第三節 間 ^ま ～ポーズ～	47
一 文表現音声上の小休止	47
二 間 ^ま の大小	48
三 間 ^ま の意味作用	49
四 抑揚と間 ^ま	49
L. L.での作業	50
第四節 テンポ（進行速度） 緩急（遅速）	50
一 テンポ・緩急の自然とテンポ・緩急の意図	50
二 テンポとイントネーション	51
三 緩徐動詞と急進動詞	52
L. L.での作業	52
第五節 リズム	53
一 等時的リズム	53

二 五七調・七五調など	54
L. L. での作業	54
第六節 強 弱	55
一 強弱の自然	55
二 現代英語のばあいとの比較	55
三 関東弁と関西弁	56
L. L. での作業	57
第七節 声の大小	57
第八節 音 色 (色つや)	58
第九節 ことば調子 プロミネンス	58
L. L. での作業	61
第五章 音 節	62
第一節 音節の把握	62
第二節 音節形成	63
第三節 開音節	64
一 開かれた音節	64
L. L. での作業	65

二 日本語と外国語	66
1 英語とくらべる	66
2 ドイツ人について	66
3 中国人のばあい	67
三 日本語での問題事実	68
第四節 開音節の根基性	70
1 語アクセントに関して	70
2 抑揚に関して	71
3 強弱に関して	71
4 緩急に関して	71
5 リズムに関して	72
6 音変化に関して	72
L. L. での作業	73
第六章 音節の微視——母 音——	74
第一節 音節の微視	74
第二節 母音発音 (「アイウエオ」発音)	74
第三節 日本語の基本母音	75
第四節 準基本母音	78
1 奥の「ア」〔a〕	78
2 「ウ」の〔u〕	79
3 「エ」〔e〕・「オ」〔o〕	80

L. L.での作業	82
第五節 変母音	83
1 [æ]	84
2 [ɛ]	84
3 [e]	84
4 [ɔ]	85
5 [i] [ü] (中舌母音)	85
L. L.での作業	87
第六節 日本語母音の諸問題	88
第七節 母音と音声生活	92
L. L.での作業	94
第七章 音節の微視——子音——	96
第一節 子音の認識	96
第二節 子音の種類	97
一 子音の多種	97
二 子音分類その一——音質によるもの——	97
1 破裂音	98
2 通鼻音	99
3 摩擦音	99

4 破擦音	99
5 弾音	99
○ 有声音と無声音	100
三 子音分類その二——調音部位によるもの——	100
1 両唇音	100
2 歯音	101
3 歯茎音	101
4 硬口蓋音	102
5 軟口蓋音	103
6 喉腔音	103
L. L.での作業	103
第三節 子音各説	105
一 カ行・ガ行・カ°行の子音	105
1 カ行の子音	105
2 ガ行の子音	107
3 カ°行の子音	108
L. L.での作業	109
二 サ行・ザ行の子音	110
1 サ行の子音	110
2 ザ行の子音	113
L. L.での作業	114

三	タ行・ダ行の子音	115
1	タ行の子音	115
2	ダ行の子音	117
	L. L. での作業	119
四	ナ行の子音	119
	L. L. での作業	123
五	ハ行・バ行・パ行の子音	123
1	ハ行の子音	123
2	バ行の子音	125
3	パ行の子音	126
	L. L. での作業	127
六	マ行の子音	128
	L. L. での作業	128
七	ヤ行の子音	129
	L. L. での作業	130
八	ラ行の子音	131
	L. L. での作業	132
九	ワ行の子音	132
十	「ン」の五種	133

	L. L. での作業	135
十一	子音余説	136
1	音声を記号で写すこと	136
2	子音は音節の装定音	137
	第四節 子音と音声生活	137
一	子音の生活	137
二	発音生活のための 子音体系の受けとりかた	139
	第八章 音節の生活へ	141
一	音節発音の生活	141
二	ことばの音をきれいに	141
三	狭母音の音節の発音	141
四	発音練習の具体的方法	142
	作業	142
	第九章 語音	144
	第一節 語音形成	144
一	語音とその形成	144
二	語音形成を決定するもの——語アクセント——	147
	第二節 語アクセント	149
	□ はじめに	149

1	高低アクセント	149
2	地方地方でちがう	150
3	共通語アクセント	150
一	東京語「語アクセント」の二大通則	151
二	語アクセントの音「高低」	152
三	語アクセントの型	153
四	語アクセントの諸問題	159
1	東京語ないしは共通語での語アクセントの高低を 左右する特別の条件（体言のばあい）	159
2	語アクセント推移にあつてのいわゆる「平板化」傾向	160
第三節 語音変化		162
一	音節に関して	162
1	語音上での音節省略	162
2	語音上での音節添加	163
3	語音上での音節交替	163
二	母音に関して	163
1	語音上の音節での母音省略	163
2	語音上の音節での母音添加	164
3	語音上の音節での母音交替	164
三	子音に関して	164
1	語音上の音節での子音省略	164
2	語音上の音節での子音添加	164
3	語音上の音節での子音交替	164

四	語音の連音節上での連母音上の同化	165
五	連語音上の音変化	165
六	音便	166
結章 音声学と言語生活		167
一	言語生活としての音声生活	167
二	音声学	167
三	音声生活	168
四	補説	169
1	話部音声	169
2	連文表現	171
3	スピーチ	171
4	朗読	171
五	声の学問	172

もよわい。こういう点では、ことに、実用音声学とも言うべきもののねらいが重要である。

従来、私は、大学の教室で、いささか、この方向に努力をはらった。

本書は、一面、日本語音声学教室のハンド・ブックとなりうるであろうか。

大学の施設には、さいわい、いわゆる L. L. がある。普及のいちじるしいこの施設を利用することによって、ともすれば‘無味乾燥’ともなりがちな音声学の教室を、多少ともうるおいのあるものとすることができようか。

本書では、所々で、L. L. 利用の方途を述べてみる。

一般読者のかたがたも、L. L. 利用のお心もちで、作業のところを読み、かつ、そのことを試みてくださるならばさいわいである。

今日、音声学書はすくなくない。そういう状況のもとにあって、なお、私のなしうるもの、あえて言えば、私がぜひとも展開してみたいと考えてきたことが、以下の実用音声学である。

この「まえがき」の元稿、「実用音声学 序」というのを書いたのは、昭和48年1月であった。1月20日が、だいじな日になったようである。

そのご、年月が流れた。成稿の歩みがゆるやかだった。大休止もあった。稿に結着をつけ得たのは、平成3年の春である。

第一章 音声学はどういう学問か

一 音声学は 言語外形の学問である

言語には、内容と外形がある。

内容は、意味の世界であり、外形は、音声または文字（→表記）の世界である。音声学は、外形の、しかも音声の世界を対象とするものである。

言語外形としての音声は、現象音とも言える。音声学は、あくまで音声現象をとりあつかうものである。これは、えてして、無味乾燥の業ともなりやすいか。しかしながら、どのような現象音も、なんらかの中みにつながっている。現象音を対象とする音声学も、他面、内面化の方向を持つ。内面化の方向、これは、ひとくちに言って、意味の世界である。さて、ここに目をはせることによって、音声学も、うるおいのあるものとなることは必定であろう。

二 音声学は 言語学の第一階梯である

言語は、意味をもって本質とするものであるけれども、意味を包む形がなかったら、言語は言語であり得ない。ことばをことばとしてきめるものは、形である。それゆえ、言語学は、外形の学、音声の学からいとなんでいくのが順当であると言える。

外形、これは、音声と表記とに見わけられる。が、表記以前にたいせつなのが、音声——という外形——である。この音声を対象とする音声学は、言語学の出発点であるとも言える。音声学にしたがう、学問上の意味の深みが、ここにある。

文芸の読解で、私どもが、快感をおぼえたとするか。その中には、